

3

のら猫クロッチと目があつて

ご縁ができたその日から そばに寄り添い 共に歩んで 同行二人

おおにし

かずこ

大西和子

株式会社 PJC
代表取締役社長 デザイナー



©1997,2016 NURUE

エンブroidアリーレースの老舗メゾン、PJC KAZUKO ONISHIのオーナーデザイナー大西和子さんと出会ったのは今から7年前。ねぐらからはほんのひとっ走り、オイラが迷い込んだ「都会の草っ原」はPJCのアトリエだった。それからというもの、大西さんは野良猫クロッチをPJCのオリジナルエンブレースの草むらで遊ばせてくれている。

※エンブroidアリーレース
(以下、エンブレースと省略)とは、エンブroidアリーレースの機械で施した刺繍レースのこと。

永遠のあこがれを描きつづけて

「野良猫だからクロッチに興味を持ったの」。
36年にわたりオリジナルのエンブレースを創ってきた大西さん、実はその生きざまこそ「野良」そのものだ。
自分のレースは「ファッションではない」とずっと思っていた。青春時代、「ドロップアウト」「アングラ」「前衛」の真つただ中を駆けぬけてきた大西さん、表現の道具がたまたまレースだっただけで、実は「紙」でも「額」でもよかったという。レースでいったい何を表現できるのか？
遠い原風景を、手にはいらな

いものを追いかけて、永遠のあこがれを描いてきた大西さん。こうして描きだされた世界が、PJCのオリジナルエンブレースの図柄となっていたのだ。
学生のころから今日までずっと絵を描き続けている。どこか満たされない気持ちの穴埋めめだという。描くのはいつも自分自身、絵は日記でもあるという。
その絵はこんなひと言とともにPJCの新作案内状としてお客様のもどに届けられてきた。
「一億光年の色」「星屑ばかり」「夢ハ見マセン、緑の子」「ホントハツタエタイ」「ど、もう一度。」

素材にこだわり 時間と手間をかける

PJCのエンブレースは一度見たら忘れられなくなる。ひとめ惚れをし、魅力の虜になった人たち、全国各地から飛行機や新幹線を乗りついでやってくる。繊細な絵柄、色の魔術、微かな濃淡、独特の美しさだ。
大西さんはまず素材にこだわる、糸からこだわる。京都の友禅の職人さんが6回も天日干しを繰り返した墨染めの糸、これがオイラの刺繍に使われている。
「クロッチは野良だから櫛が通るような毛並みではだめ」と大西さんは、さまざまな方向に刺繍糸があげられる「乱れ刺し」でオイラの毛並みを表現してくれた。と、こんな具合に、すべての作品に大西さんの特別な思いと職人の高度な技が込められている。

膨大な時間と手間をかけて創りあげられてきたエンブレース。
運命を変えた 生成りレースとの出会い

大西さんの運命を変えたのは、バツタ屋に山積みされた糊抜きされていない生成りのデッドストックレースとの出会いだ。当時は生成りのレースの商品などどこにもなかった。糊抜き工場を知らなかったため、服にするため、それから毎日のように、自宅の風呂場で、足で踏んで糊抜きを繰り返した。糊で足は真っ黒になった。糊ぬきをした生成りレースを干す。洗われてこそつぱりとしたエンブレースの素材の感触は、人の内にある自然身

「クロッチは野良だから櫛が通るような毛並みではだめ」だから、さまざまな方向に刺繍糸があげられる「乱れ刺し」



(上写真) PJC クロッチエンブレースと大西さんの絵
(下写真) 緑に囲まれたPJC 目白本店入り口で大西さんと一緒に

体感覚を呼び出す。そんな懐かしさにも似たあたたかな感覚だ。こうして大西さんは8年間、生成りのレースの服だけを作りつづけた。やがて、そのデッドストックレースがなくなつた時、「布の宝石箱」と評される大西さんのオリジナルレース作りがはじまった。それからというもの、いつも「八方ふさがり」、いつも「絶体絶命」、いつも「挑戦」だった。だから、いつも「なんで？」と問い続けてきた。でもどんな時にもあきらめずに工夫した。いつも「偶然」に導かれてきた。そして今日まで、華やかだけれど自然の素朴さを感じさせ、どこかあたたかみのある「特別な日常着」を作り続けている。
「PJCのエンブroidアリーレースを手にしてくれた人が幸せに

なつてほしい。」「それを着ている時に幸せになつてほしい」。
今日も大西さんは、お客様の笑顔を思い浮かべ、仕事をしている。

自分を動物に例えるなら

「世界のクロッチになつてね。のら猫の応援団長になつて！」と大西さんからエールをもらった。最後に「自分を動物に例えるど？」と尋ねてみた。しばらく悩んだ後に、
「犬かなあ……」。

■大西和子(おおにしかずこ)
オリジナルエンブroidアリーレースの老舗メゾン、PJC KAZUKO ONISHIのオーナーデザイナー。高度な刺繍技術と独自の「手直し仕上げ」を用いた比類無き作品の数々を世に送り続けている。

